S002-02 **会場: B** **時間: 9 月 30 日 13:20-13:40**

日本地球電気磁気学会の創設、並びに戦後の電波物理研究所変遷の記録 － 前田憲一先生のメモから

木村 磐根 名誉会員

A historical review of the foundation of “Society of Terrestrial Magnetism and Electricity of Japan” in 1947 and of the transition of “Physical Institute of Radio Waves” after the World War II - After the memos of late Ken-ichi Maeda.

Iwane Kimura, Honorary member

Ken-ichi Maeda, Emeritus Professor of Kyoto University, passed away in 1995, left his memos recently accessible to me for the period from 1947 to 1949. From 1941 to 1943, he was the director of the Physical Institute of Radio Waves of the Ministry of Education. He experienced two big events, one was the foundation of the Society of Terrestrial Magnetism and Electricity of Japan and the other is a transition of his Institute to be merged into a new big scale National Research Laboratory, ‘Electrical Communication Laboratory(ECL)’established in 1948. His memos involve the minutes of meetings held for the preparation of the foundation of the Society, and of numerous meetings governed by GHQ(General Headquarters, US Army forces, Pacific), for the establishment of the ECL. These two events are closely related to our present Society. I will introduce his memos with the aim to review historical backgrounds of our Society and the related Institute, at the occasion of the 60th anniversary of the foundation of our Society. Finally, I acknowledge Dr. Sawako Maeda, Professor of Kyoto Women’s College, from whom I could receive the memos of Ken-ichi Maeda recently. She was given the memos directly from Prof. K. Maeda around 1980 for her interest to science history.

昨年末前田佐和子会員から､昭和２２年から２４年にかけての前田憲一先生自筆のメモを保存しているので役に立てる方法についてご相談を受けた。科学史に興味を持っておられた前田佐和子会員に、当時京都産業大学教授をしておられた前田憲一先生が参考にして見たらと言って渡されたものだそうである。前田佐和子会員は、このメモをなんらか生かす方法を考えるよう筆者に託された。今回学会創立６０周年記念特別セッションに本学会の歴史的なことをUpper の立場で話すようにという依頼をうけた｡筆者が託された前田先生メモは丁度この目的に合致すると考えられるので、関連の資料も参考にしてこの内容をご紹介することとした。

前田憲一先生はメモを書かれた当時文部省電波物理研究所の所長であった｡昭和２１年からは学術研究会議（今の学術会議）のもとに電離層特別委員会が作られ、国内の地球電磁気関連の多数の研究者が毎月集まって研究成果や研究方針の討議がなされたなかで、それまで物理学会の一分科として活動をしてきた研究者が新しい独自の学会の設立を計画され、２２年５月に日本地球電気磁気学会設立総会が東大で開催された。上記のメモには丁度その頃の日日の会議の記録が含まれているが、例えばこの学会の設立発起人の中には、長谷川万吉、永田武、前田憲一他、後々まで本学会の中心的人物として重要な方々のほかに、理研の仁科、京大の湯川、小林、宮本、東大の山内、小谷、北大の中谷宇吉郎などの名前も入っている。また長老として、長岡半太郎、田中舘愛橘らの名前がみられ、この学会がどれほど広い分野の錚々たる物理学者によって支援されたかが良く分かる。電離層特委の活動もほぼ毎月開催され、学会と平行して活動が続けられた。その活動の流れは現在まで脈脈と継続している。

一方、終戦直後の昭和２０年秋、ＧＨＱから電波物理研究所の調査のために派遣された米軍科学者 D. K. Bailey は、戦時中電波物理研究所が南洋諸島、東南アジア地域の電離層観測所で観測された電離層データがＦ２層の赤道異常などを含む素晴らしいものであることを知り、戦時中軍に協力した電波物理研究所を閉鎖するのではなく、逆にその研究所の継続を積極的にバックアップしたことはよく知られた史実である。戦後のこの研究所を含む日本の通信関係研究機関のあり方については、丁度上記のメモの期間にＧＨＱの指導の下にこれらの研究機関の責任者達が昭和２２年の１年間に２０数回の会議を重ね、２３年８月に逓信省電気通信研究所が設立された。これらの会議の詳細の記録がすべて上記のメモに含まれている。もともと電離層の研究も含め逓信省電気試験所においては、電波の研究、および電力分野の研究が行われてきたが、戦後のＧＨＱの元での会議では、いわゆる通信分野の研究を電力分野から明確に独立させ、米国のベル研究所をモデルにして実用化を重点にした研究所を作ることが基本方針であったようである。その機構の中に文部省の電波物理研究所を併合するというプランとなった。当時の前田憲一所長は、電離層観測を含むこれらの基礎研究は実用を柱にした新研究所の機構とはそぐわないと強く反対されたが、その意見は通らず結局電波物理研も併合した「電気通信研究所」が設立されたのである。しかし昭和２５年には電離層観測部門は中央電波観

測所として分離され、これが昭和２７年には郵政省電波研究所として発足、昭和６０年には通信総合研究所に、その後現在の独立行政法人の情報通信研究機構に変遷し、一方電気通信研究所は日本電信電話公社電気通信研究所を経て日本電信電話株式会社（ＮＴＴ）研究所に変わってきている。それらの大きな流れの源流が、ちょうど上記の前田憲一先生のメモに集約されている点でこのメモは貴重な資料である。